

学校法人 名古屋国際学園 Nagoya International School

Invention Convention

もしあなたが、日常のイライラを解決してくれるアイデアグッズ、こんなものがあればいいのにと願わずにはいられない、不便を便利に変えてくれる画期的な製品を探しているなら、名古屋国際学園の5年生 31 名のバラエティに富んだ発明品の中から、きっと気に入ったものが見つかるに違いありません。宿題を忘れないよう教えてくれるアラーム、かばんに入るコンパクトなポータブルデスク、サッカーのドリブル練習の難易度を上げる電動コーン、教室の机にくっついて地震の時にすぐに持ち出せる非常用持ち出し袋などなど、毎年恒例の“Invention Convention”には、今年も注目度抜群のユニークな発明品が勢揃いしました。

● 求む！投資家

日本語で“発明見本市”とでもいったところでしょうか。会場にはそれぞれの発明品と、発明のアイデアから完成に至るまでの経過を図解したボードを設置したブースが並びます。この日小さな発明家達は、一日中ひっきりなしにブースを訪れる他の学年の生徒達や保護者、教師、とにかく興味を持ってくれそうな全ての人に自分の発明品を一生懸命に宣伝します。アイデアの誕生から完成に至る経緯、その仕組み、セールスポイント・・・そしてブースを訪れる人々は“投資家”として、自分が実際に使うのならどの作品がいいか、お気に入りの発明品を1つ選んで投票するのです。

そしてそれぞれの発明品は、科学技術について学んだ IB 初等教育プログラムの一単元の集大成でもありました。



● 自由な発想、ひらめき、そして粘り強さ

遡ること6週間前、この単元を始めるにあたり5年生は、世界を変えた重要な発明からそれほど重要ではない発明に至るまで、様々な科学技術と、それらが社会に及ぼした影響について研究しました。そして、この単元の間中、生徒達が常に持ち歩いた2冊のノートがありました。「発明日記」と「アイデアブック」です。この2冊が、自分の発明を暖めている間、発明のポイントを絞り、アイデアをまとめるのに重要な役割を果たしました。「発明日記」には、とにかく発明に結びつくと思われる事は何でも、思いついたことを書き留めました。そこから発明のアイデアが生まれたら、今度は「アイデアブック」に記録しました。もちろん、思い通りにアイデアが浮かばず行き詰まることだってあります。そんなとき教師は生徒達に、アルバート・アインシュタインの自由な発想とこまめな記録、アレクサンダー・グラハム・ベルの粘り強さ、そしてその両方を持ち合わせたビル・ゲイツの話を思い起こさせました。「偉大な発明は、最初はくだらないと思ったことや、ほんの一瞬のひらめきから生まれる」と繰り返し言い聞かせました。

こうして生徒達はこの単元の最終目標である自分の発明品の完成のために、アイデアを形にするまで決して諦めず、創造し、試行錯誤を繰り返しました。本当に自分の発明品がオリジナルなのか、米国特許商標局のホームページで確認することも怠りませんでした。まだ見ぬ“投資家”宛に、発明品を売り込む手紙も書きました。そしてついに当日、会場に現われた“投資家”の中には、実際に発明品の購入に興味を示した人もいたのです。

